

緑のまきば

1999 No.32

小金井緑町教会
 小金井市緑町四一六三三
 電話〇四二三八一七九六一
 編集・牧師 山畑謙

説教

『礼拝』

山畑 謙

兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。
 自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。
 これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。(ローマ十二・二)

「礼拝」の大切なポイントに「ささげる」という事がありません。聖書の古代世界では、礼拝とは神にいけにえをささげる事でした。それは感謝のしるしでもあれば、罪のゆるしを乞うためのささげ物でもありました。動物や穀物が火で焼かれて、香ばしい煙となつて天の神のもとへとささげられていました。そのささげ物は、一番良いものをささげるのです。不要なものや、残り物でももちろんいけません。一番良いもの、一番大切なものを神にささげるのです。そもそも、なぜささげるので

しょう。富と繁栄という御利益が欲しくて、先行投資としてささげ物をささげるのでしょうか。もしもそうであるならば、神を自動販売機のようなものにする事になります。投入したお金に見合う恵みを求め、それがかなわないと、嘆いたり、怒って機械を蹴ったり、抗議の電話をするような事をするのです。しかも信仰や神や正義の名のもとにです。自販機の神など、馬鹿な話に聞こえるでしょうが、これは悪魔的な魅力をもつてのび寄ってくるので、

要注意です。

改めて、なぜささげるのか考えたいのです。それは神から多くの恵みを頂いたからではありませんか。頂いた恵みに対する感謝の応答として自分をささげるのが礼拝になります。ですから、神からどれだけのものを頂いているかという事が礼拝のカギになるわけです。

実は、私たちは神からいろいろな恵みを頂いているわけですが、なかなかそれに気がつきません。いろいろなものを失つて、辛い思いをして初めてその大切さに気付く場合も少なくありません。そのように多く頂いている恵みの中の一つも一番中心にあるものは何かという事について、次のように聖書に記されています。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(一ヨハネ四・十)

この方にある恵みは、健康や財産のように失う事によって気付くようなものではありません

ん。私たちの人生の中で、不思議な出会いをおして、この方が私たちへと歩み寄ってこられます。そして「わたしに従ってきなさい」と言われてついでいくと、十字架に架けられるその方を仰ぐ事になりました。裏切った弟子たちが深い挫折感をもって見上げたであろう十字架を、私たちも同じように見上げることになります。空しさを抱えて歩む者の傍らに、復活された主が再び歩み寄って来られます。その釘打たれた御手が差し伸べられている事に、聖書によって目を開かれる時に、自分は何を与えられているのかに気付かされるのです。

迷いやすい羊のような私たちは、すぐに自販機の神を求めてしまいやすいものです。なんとか憐れみを頂いて、与えられている愛にいつも新しく気付かされたいと願います。そして独り子を私たちのためにお遣わし下さった生ける神に自分の体をささげる(献身)礼拝へと向かおうではありませんか。